



嵐山 光三郎氏

平成二十年十月十二日に、学術メディアセンター（AMC）開設記念催事が行われた。十四時より常磐松ホール（AMC棟1階）にて、講師に嵐山光三郎氏と青木保文化庁長官を招いて記念講演会が開かれ、続いて十六時四十分よりAMC施設見学会、十七時二十分より「カフェラウンジ若木が丘」（AMC棟1階）を



青木 保氏

会場として来賓・関係者を中心に交流会が催された。講演会では、まず安蘇谷正彦学長より、日本人の主体性を保持しながら日本の文化を語ることでできる人材を育成するという本学の教学の理念に即して、学術メディアセンターはその中心的な場所となつて欲しいという挨拶がなされた。

学術メディアセンター開設記念催事

國學院大學
研究開発推進機構
機構ニュース

Vol. 2 No.2
 発行人 阪本 是丸
 編集人 松本 久史
 〒150-8440 東京都渋谷区東 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0162
 FAX (03) 5466-9237

目次

◆ 学術メディアセンター開設記念催事	1
◆ 伝統文化リサーチセンター資料館全面開館記念式典	3
◆ 公開学術講演会	
「神社本殿の建築的特質」	
(伝統文化リサーチセンター客員教授・芝浦工業大学教授 藤澤 彰)	4
◆ 平成二十年度 伝統文化リサーチセンター 活動報告	4
(文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業	
「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」推進)	4
◆ 国際研究フォーラム	
「ウェブ経由の神道・日本宗教	
—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—	
(主催：國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、	
共催：科学研究費補助金基盤研究(A)	
「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」)	6
◆ 第三十四回日本文化を知る講座	
「現代人にとつての神々の物語—教材としての神話—」	8
◆ 「縄文時代の大型石棒」	
(考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究・公開事業)	
(兼担任教授 谷口康浩)	10
◆ 研究開発推進センター研究事業	
「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」山口県調査概要	
(研究開発推進センター PD 研究員 戸浪 裕之、中村 聡)	11
◆ 「追悼」青木周平教授と研究所、そして機構	13
◆ 彙報	14
◆ 資料紹介「河野省三学生時代ノート」	16

本年度より本学の客員教授に就任した嵐山氏は、「芭蕉とは何か—『奥のほそ道』の謎—という演題で講演を行った。嵐山氏は学生時代以来芭蕉に関心を寄せており、平成十八年にはそ

の著作『悪党芭蕉』において第三十四回泉鏡花文学賞と第五十八回読売文学賞を受賞している。講演では、まず十月十二日が奇しくも芭蕉の命日・芭蕉忌であることに触

れ、芭蕉最晩年の句「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」、「秋深し隣は何をする人ぞ」などを紹介した。

続いて「古池や蛙飛込む水の音」という句に関して、子供のころからこの蛙は果たして何匹であろうかと疑問に思っており、そしてそれになかなか納得のいく答えが得られなかったというのを幾つかのエピソードを交えながら語った。

この句に関連して、詠まれた年に江戸の大火があつて芭蕉自身も深川の庵から焼け出されたことを指摘し、「古池」とは実はこの大火の混乱を受けた混沌たる泥水の池ではないかとした。そしてそのように見るとして捉えられてきたのに対して、むしろその写実性にすこみがあるのではないかと述べた。

更に、この句以前には蛙はその鳴き声を聞くという形で歌のなかに登場していたのに対して、芭蕉は蛙が飛び込む際の水の音を「発見」して歌に詠み込んだと指摘したが、これについては最後に実際には蛙は水に入る時には音を立てないように思われると述べ、そもそもこの句は芭蕉がフィクションとして作りあげた情景ではなかったか——それ故飛び込む蛙が何匹かは大きな問題ではない——と論じた。

また、芭蕉が幕府の密命を帯び

て「みちのく」へ向かったという説に触れた上で、「五月雨をあつめて早し最上川」、「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」、「象潟や雨に西施がねむの花」、「夏草や兵どもが夢の跡」などの代表的な句について、実際に句が詠まれた地を訪れた体験を語り、更にその体験に基づいた解釈を幾つか紹介した。

他方、日本文化の海外への広がりという点と関連して、俳句の海外での捉えられ方についても触れた。例えばアメリカにかなりの俳句人口が存在して種田山頭火の「まっすぐな道でさみしい」が広く受け容れられていることや、あるいはたんぽぽという季語を例として、それが世界各国で異なる詠み方がなされているといったことについて、幾つか具体的な句を紹介しながら述べた。

続いて青木氏は、「グローバル化・情報化時代における日本文化」という演題で講演を行った。まず近年中国政府が対外的な文化政策に力を入れており、中国語・中国文化の普及を図るための機関である孔子学院が現在世界各国二百箇所設けられていることに触れた上で、日本にも同様の機関が必要ではないかという問題提起を行った。

これを受けて、現在の世界において日本文化がどのように受け入れら

れているかということに話題を移し、日本初のアニメやマンガやゲーム、あるいはいわゆるカワイイという言葉に代表されるようなファッション、更には日本の食文化や、また村上春樹などの文学作品などが世界中で受け入れられていることを指摘した。そして歴史的には過去にも例えば二十世紀初頭のヨーロッパにおけるジャズやポピュラーのように日本文化が好意的に受け入れられたことがあったことに触れた上で、今日的な状況の特徴として世界各国において広範な層に日本の現代文化が受け入れられている点を挙げ、これはこれまでの日本の歴史を振り返ってみても、かつてない出来事ではないかと述べた。

他方、現在において文化というものを考えようとするならば、東西冷戦終結後、とりわけ一九九〇年代以降のグローバル化が大きな意味を持っているとし、このグローバル化は一面において文化の普遍化・一元化を推し進めようとするものであるが、それに対してそれぞれの文化はその固有性を持ち続けるべきであるとした。

もちろん文化というものは常に他文化との交渉のうちに変化し続けていく性質を持っているが、特に日本の文化について言えば、歴史的に道教、仏教、儒教、そしてまた西洋文

化の影響を受けながら、かつそれらを比較的衝突の少ない形で取り込んできたとし、その特徴を「混成文化」という言葉で述べた。そしてこのように、外来の文化を上手く取り込みながら、同時にまた固有の文化的同一性を保持しているという点において、日本文化はグローバル化時代の課題に上手く適応しており、そこに世界中が注目していると説いた。

そしてこのように考えるならば、現在受け入れられている現代日本文化の根底にある世界観や自然観、あるいは人間観といったものを考察し、それらを新しい二十一世紀の世界観として日本から世界に発信していく必要があるとし、また國學院のAMCにはそうした方向における展開が期待されていると語った。

両講師の講演に続いてAMCの活動を紹介するビデオが上映され、その後に行われたAMC施設見学会と合わせて、それぞれの活動状況についての理解が深められた。また、記念催事の締めくくりとして行われた交流会では、AMCの今後の活動について、活発な意見交換が行われた。

伝統文化リサーチセンター資料館

全面開館記念式典

伝統文化リサーチセンター資料館は、平成二十年三月に竣工した國學院大學学術メディアセンター（Academic Media Center）棟の地下一階に設置されている。当該建物は、地上六階、地下二階の総合情報センターとも呼べる建物で、伝統文化リサーチセンター（文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」）の資料館、研究本部、収蔵庫、研究スペースのほか図書館、コンピュータ教室など、様々な分野



の研究、活用、公開、情報の管理、保存などのための施設が設置されている。当資料館はこの中に設けられた博物館相当施設で、展示、公開活動により、学生教育ならびに広く一般にその研究成果を公開することを目的としており、若手研究者の育成のための研究活動と資料館機能が一体となった大学博物館としての活動が期待できる。

十月一日（水）にこれまで展示作業中であった部分全ての準備が整い、全面開館に至った。展示室は、

「祭祀遺跡に見るモノと心」・「神社祭祀に見るモノと心」・「國學院の学術資産に見るモノと心」の三つのゾーンを中心に、企画展示ブースなどを含めて約一六〇〇平方メートルの広さを有している。資料館の展示には、実物やレプリカ、パネルや映像など観覧者の展示への理解を深めてもらうための様々な手法がとられているが、特に館内に九カ所設けられている情報検索コーナーでは、より詳細な解説や研究の最新情報を随時更新しており、これを利用することで、展示内容をより深く理解することができる仕組みも整えている。

開館当日は、午前十時半より清祇が斎行された（斎主・茂木貞純教



授）。また、同日午後一時より、全面開館記念式典が催行され、宇梶輝良理事長、吉田恵二教授らが挨拶を述べ、あわせて各機関長が代表となってテープカットを行なった。観覧時間には、担当教員が各展示ブースにて解説を行い、熱心に質問をする姿も見受けられた。

また、同日から企画展示ブースでは、特別展示『祈りのカタチ―元々本々』も始まり、あわせて約二百名の観覧者が訪れ、新しい資料館を観覧した。

お問い合わせ先・研究開発推進機構事務課03（5466）0401
http://www.kokugakuin.ac.jp/ocard/ORC-activities_museum_guide.html

公開学術講演会 「神社本殿の建築的特質」

伝統文化リサーチセンター客員教授・芝浦工業大学教授 藤澤 彰

神社の本殿とその淵源に関する研究は、半世紀以上に福山敏男氏が磐座・神籬からの段階的成立論を提唱しているのだが、現在に至るまで数々の説がなお打ち出されている状況である。とりわけここ十年の間では、島根県の青木遺跡など、平安時代前期以前の神社とおぼしき遺構の発見もなされ、かつ古代神社制度史等からの研究も活発であり、いわば「古くて新しい」神社史上の論点となっている。

そうした展開もあり、現在神社本殿に関する議論の中で、神明造・大社造といった多様な建築のつくりが、それぞれ古態をどれだけ有し、いかに相互に体系づけられるものであるかという点にも、これまで以上に焦点が定まるようになった。今回の講師であり、かつて福山氏の薫陶を受けている藤澤彰教授は、いわば神社建築研究の本流というべき立場にあるが、この講演会では、現代的関心を集める前記の論点に対して、本殿のつくりの面から有益な視座を示した意義深いものとなった。

藤澤教授はまず、神明造や大社造

など、神社建築のつくりを紹介しながら、本殿建築の発展過程を考える上で重要な、土台構造や柱、屋根などの特徴を、写真を用いてわかりやすく解説した。

その上で、本殿のつくりの体系について紹介、神明造から流造へ派生していく等の要点からなる既存の説が、母屋と庇との関係性にのみ根拠を置いているために限界があることを指摘した。その上で、かつて福山氏が着目したところであるが、常設本殿以外の形態、すなわち、神社本殿のない神社、さらに仮設本殿を設ける神社の存在に触れ、こうした神社に通ずるものとして、適宜神まつりを行うことが可能な「移動できる社殿」という神社のあり方を示唆した。そして、その典型として、元来は比較的新しい本殿の造りとされてきた春日造と流造をあげた。その理由として、これらは土台を作る建築のつくりであり、移動も可能であることを、賀茂別雷神神社の鎌倉期・江戸期における遷宮の実例をあげて、詳細に説明した。最後に本殿のない形態・仮設本殿の形態が古態と位置

づけられることから、これらの建築のつくりが、古いものではないかという指摘をして、講演を終えた。

この講演は、神明造・大社造といった掘立柱を立てるつくりが古いものと解されがちな一般的な認識を再考させる意義を有するものであり、神社の有する多様性の実態という、古代神社史上の論点解明にも、重要な示唆を与えるものといえよう。

なお、この講演は、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」の成果である。

平成二十年度

伝統文化リサーチセンター 活動報告

（文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業

「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」推進）

◆「祭祀遺跡に見るモノと心」グループ 平成二十年度活動報告

◇公開講座

- ・開催日 平成二十年十月四日（土）
- ・講師 加藤里美（伝統文化リサーチセンター講師）・杉山林継教授（伝統文化リサーチセンター長・教授）
- ・内容 「祭祀遺跡に見るモノと心」研究グループが、調査対象地域とし



ている出雲に焦点をあてた発表であった。加藤講師は、「祭祀遺跡・遺物から古代出雲のまつりを考える」をテーマに祭祀考古学の学史を踏まえ、出雲地域における伝統的祭祀の様相を具体的な祭祀遺物を通して明らかにし、杉山教授は、「出雲という世界」と題して、大型古墳や青銅器祭祀を通して考古学的により広い視点から出雲世界を考察した。

◇フォーラム「伊豆の神仏と國學院の考古学」

・開催日 平成二十年十月二十五日(土)

・発表者 吉田恵二(伝統文化リサーチセンター教授) 「列島における儀礼・祭祀の誕生と展開―モノから心へ―」、中村耕作(伝統文化リサーチセンターRA) 「神道考古学の形成と伊豆の祭祀遺跡―大場磐雄の伊豆調査―」、朝倉一貴(大学院博士課程前期)・中島大輔(大学院博士課程前期) 「三宅島物見処遺跡の発掘調査概要」、田中大輔(伝統文化リサーチセンターIPD研究員) 「古墳時代における土器集積について」、深澤太郎(伝統文化リサーチセンター助手) 「うみやまのあひだ―伊豆の神々とランドスケープ―」、内川隆志(伝統文化リサーチセンター准教授) 「伊豆諸島の祭祀遺跡」、栗木崇(伝統文化リサーチセンター共同研究員) 「走湯権現関連遺跡群について」、外岡龍二(下田市史編纂委員会) 「南伊豆の祭祀遺跡」

・内容 今回のフォーラムは、研究対象地域である伊豆半島・伊豆諸島にしほり「伊豆の神仏と國學院の考古学」と題して開催した。当該地域は大場磐雄が神道考古学を提唱するに至った重要な地であり、本学考古学研究室による三宅島物見処遺跡の調査や考古学資料館を中心とした伊

豆諸島全域に亘る祭祀遺跡の調査実績を踏まえ、これまでの研究活動を再評価するものであった。また本地域をフィールドとする主たる研究者をお招きし、現地での研究活動を認するとともに、伊豆の神仏を総合的に論じ、本地域における「國學院の考古学」の意義を問う内容であった。

◆「神社祭祀に見るモノと心」グループ 平成二十年年度活動報告

本グループでは神社祭祀において使用される様々な「モノ」を通して、その背景にある人々の「心」を解明することを目的として研究を進めている。研究方法としては

神社祭祀の歴史的資料論的研究
現代の年中行事と神社祭祀研究
を二つの柱として調査研究を進めており、その成果報告として平成二十年度には以下の報告会・講演会を行った。

◇「神社祭祀に見るモノと心」 研究プロジェクト

平成二十年年度第一回研究報告会

・開催日 平成二十年六月二十一日(土)

・内容 島田潔客員研究員により、祭祀の地域差と伝播に関するアンケートの成果報告として、全国の祭祀に見られる山車や屋台などの「曳き

もの」と「動物」の分布状況の報告がなされた。また、小島優子ポスター研究員により日牟禮八幡宮左義長祭の曳きものの構造、儀礼の構成と同祭祀に見られる伝承について実地調査を交えた報告がなされた。

◇公開講座

・開催日 平成二十年十月二日(木)

・内容 茂木貞純伝統文化リサーチセンター教授により神道関係文化財データベースの構築・全国神社に対するアンケート調査、秩父夜祭・日牟禮八幡宮左義長祭・鹽竈神社等での実地調査の成果を交えた講演がなされた。また、加瀬直弥伝統文化リサーチセンター講師により神社祭祀と深く関わる「祓」が仏教や陰陽道による「祓」として展開されていたことや、「祓」に用いられる祭具について本学所蔵の資料を用いて論じられた。

◇フォーラム「鹽竈神社社殿の変遷」

・開催日 平成二十年十月十一日(土)

・内容 池谷浩一客員研究員により、仙台藩と鹽竈神社の関係について、尾崎保博平野神社宮司・元鹽竈神社学芸員により鹽竈神社社殿形式の変遷について発題がなされた。本フォーラムでは、鹽竈神社社殿形式の変遷に伴い、年間の祭祀及び社人の構成や神職の席次の変化等があったこ

と、それは四代藩主伊達綱村の主導により制作された『鹽竈神社縁起』を基盤として行われたこと、その背景には古代陸奥国の「職(しき)」の継承者としての自覚が綱村にあったことが明かにされた。

◇公開学術講演会「神社本殿の建築的特質」

・開催日 平成二十年十月十八日(土)

・内容 藤澤彰芝浦工业大学教授により、神社の建造物(本殿)には流造などの様々な形式があること、さらに移動を前提とした構造とその場所に留まることを前提とした構造の社殿があることなどについて実例を提示しながら講演が行われた。

◆「國學院の学術資産に見るモノと心」グループ 平成二十年年度活動報告

今年度の「國學院の学術資産に見るモノと心」研究グループでは、第二回研究フォーラム「國學院における近代国文学の形成―武田祐吉の学問を中心に―」(平成二十年十月二十九日)、公開講座「國學院の歴史と学問」(同年九月二十三日)、「國學院の学術資産に見るモノと心」(同年十月三日)を開催した。

第二回研究フォーラムは、本学AMC棟一階常盤松ホールで開催した。本研究グループでは、本学所

蔵資料・コレクションの分析を通じて、國學院における近代人文文学の形成に関する研究を行なっている。今回は本学の国文学研究に重要な役割を果たした武田祐吉に焦点を当て、その聲咳に接した本学名誉教授の中村啓信氏を招き、当時のエピソードを伺うことで、武田の学問を多面的に理解することを目指した。当日は、まず本センター・ポスドク研究員の渡邊卓氏の「武田祐吉関係資料」に関する成果報告ののち、中村啓信氏から、「日本書紀総索引」と『校本日本書紀』の編纂経緯、武田の著者の一つ『古事記研究 帝紀攷』をめぐる諸問題について講演を頂いた。中村氏の講演により、武田の人となりやその学問の特色を知ることができた上、草創期の日本文化研究所の研究事業の一端についても知り得たことは、本研究フォーラムの最も大きな成果といえよう。

公開講座「國學院の歴史と学問」は、北海道滝川市の國學院短期大学との共催、また滝川市の全面的な後援を受けて、同短期大学において開催された。当日は、本センターの青木周平教授の総司会、國學院短期大学の月岡道晴准教授の進行のもと、松本久史講師「『創国学校啓』の系譜」、齊藤智朗助教「國學院の設立と展開―建学の精神・理念と校歌―」、渡邊卓ポスドク研究員「折

口信夫・武田祐吉の歌謡研究―「久米歌」を中心に―」、秋元信英教授「國學院の学問と北海道―神道学・国史学を中心に―」について講演があった。当日は國學院短期大学生・滝川市民百二十名の参加があり、公演後に活発な議論が交わされた。

また、3グループ共通の公開講座の一つとして、公開講座「國學院の学術資産に見るモノと心」が開催された。本研究グループからは、青木周平教授と齊藤智朗助教が参加した。青木教授は「武田祐吉の古事記学―講義ノートを通して―」、齊藤助教は「明治二十年代初頭の国学と皇典講究所・國學院」という題目のもと、講演を行なった。



青木 周平教授

国際研究フォーラム

「ウェブ経由の神道・日本宗教―インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ―」

主催：國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

共催：科学研究費補助金基盤研究(A)

「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」

本国際研究フォーラムは、平成二十年十月二十六日(日)に、主催である日本文化研究所の総合プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」の一環として、科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の共催を得て、第一部「研究者フォーラム」・第二部「国際研究フォーラム」という二部構成で行われたものである。趣旨としてはウェブ上の情報を教育・研究においてどのように適切に用いているか、またそこにどのような課題があるのかということを考え、かつ日本宗教・文化が日本語以外の言語においてどのように教えられているのかについて具体的な報告を受けながら、宗教文化教育との関わりについても議論を深めようとするものであった。

第一部「研究者フォーラム」

は、黒崎浩行をコーディネーターとし、井上順孝による趣旨説明の

後、六名のパネリスト「カール・フレール Carl Freire (University of California, Berkeley, USA)」、エリック・シッケタンツ Erik Schickelanz (東京大学大学院)、ローラン・ゴディノー Laurent Godinot (INALCO, France)、岡田昭人(東京外国語大学)、加瀬直弥(國學院大學)、平藤喜久子(國學院大學)が発題を行った。

まずカール・フレールは、自身の日本史の授業の体験を踏まえた上でインターネット上に公開されている画像史料を通して学生の関心を引き付けることができるとし、東京国立博物館のウェブサイトを具体的な例として挙げた。また授業の構成についてインターネット上のシラバス集(例えばアメリカ宗教学会(AAR)ウェブサイトのもの)を参照することが可能であることを指摘した。

次にエリック・シッケタンツは、宗教教育にインターネットを活用するという観点から、ユーチューブ上



に様々な宗教儀礼が動画として投稿されていることを例示し、それらが具体的なイメージを喚起するという点において有用である一方で、しかし必ずしも学術的な厳密さを備えていないことを指摘した。そして専門家も一般に人気のあるウェブサイトに對して積極的に働きかけていく必要があるのではないかとという問題提起を行った。

続いてローラン・ゴディノーは、外国人学習者が日本宗教について学ぼうとする際にどのようなサイトが望ましいかという観点から、カトリックのフランス司教会議のウェブサイトとを一つの例として、社会問題や対外関係などについて宗教者側からの見解が明確に示されているサイ

トがあると良いのではないかと述べた。

これらを受けて岡田昭人は、岡田がコーディネーターを務めている日本人学生と留学生が共同で学習する国際教育プログラムの概略と、そこでどのようにウェブが活用されているのかについて述べた上で、やはりウェブ上の情報には必ずしも学術的に信頼できないものが含まれていることを指摘し、ウェブ利用に関するガイドラインが必要なのではないかとという問題提起を行った。

また加瀬直弥は、國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の一環として作成された神社資料データベースを参照しながら客観的な資料・データに基づいた情報を発信することの重要性を述べ、その上でそこに至る入り口をどのように分かりやすく提示していくかという課題があることを指摘した。

最後に平藤喜久子は、東京外国語大学の国際教育プログラムにおいて外国人留学生を対象として日本の宗教についての授業を担当した経験を踏まえ、外国人留学生たちが日本宗教に對してどのような関心を持ってきているのかということ为例示した上で、やはり現代の日本の宗教について関心が持たれていること、そしてそれをウェブ上で調べようとした場

合に日本宗教の現状がわかるようなサイトが乏しいことを指摘し、現代日本の宗教状況を把握できるデータバンク的なウェブサイトの必要ではないかと述べた。

第二部「国際研究フォーラム」は、井上順孝を司会とし、三名の発題者「アラン・カミングス Alan Cummings (SOAS, UK)」、ミクヤエル・ヴァフトウカ Michael Wachutka (Tübingen University, Germany)、ジャン・ミシェル・ブテール (Jean-Michel Butel, INALCO, France)」による発題の後に二名のコメントータ「師茂樹(花園大学)、渡辺学(南山大学)」からコメントをもらい、最後に会場全体で質疑応答を行うという手順で行われた。

まずアラン・カミングスは「日本古典芸能の教育におけるインターネットの可能性」という題で発題を行った。前提としてインターネットを背景として学生の情報に対する態度、あるいはその用い方が大きく変わったことを認識しなければならぬとし、そうした状況においては単に文字情報だけでなく視覚的なものや聴覚的なものまでも含めた複合的なリテラシー、すなわち「ハイブリッドリテラシー」について考えなければならぬと述べた。具体的な



例としてインターネット上で歌舞伎に関する資料がどのように取り扱われているのかについて概観し、原資料のデジタル化が進んで研究に益するようになってきている一方で、それが初学者の教育に有益なものには必ずしもなっていないという情報へのアクセスのしやすさ、あるいは使いやすさといった問題があることを指摘した。最後に、いくつかの問題はあるとしても例えば日本芸術文化振興会によって歌舞伎などを英語で紹介する有益な試みがなされていることについて触れ、この「ハイブリッドリテラシー」を念頭に置いてより充実させられていくべきではないかという問題提起を行った。

またミヒヤエル・ヴァフトウカ

は「ドイツ語圏の日本宗教教育と教育・インターネットは教材・学材として使えるか」という題で発題を行い、ドイツにおける日本学と日本宗教研究の状況を概観した上で、インターネットが学生の学習のあり方そのものを変容させてきていることを指摘し、かつそれに応じた新たな形において情報発信が行われなければならぬと述べた。そしてマーク・シュマツハ氏の「日本の仏教と神道の諸尊や神々の写真事典 A to Z Photo Dictionary of Japan's Buddhist and Shinto Deities」や、ベルンハルト・シャイド氏の「日本に於ける宗教 Religion in Japan」などの学習の際に有用なウェブサイトを幾つか紹介した上で、双方向コミュニケーションを学習の過程に組み込むことができるという面においてもインターネットを利用する積極的な意味がある」とWeb2.0に触れながら述べた。

最後にジャン・ミシエル・ビュテルは「日本の宗教および文化に関する信頼性の高いデータへのアクセスをより良くするために―実践的アプローチの観点から―」という題で発題を行い、まずフランスにおける日本文化・宗教研究の現状を概観した上で、フランス語で読むことができ、また学生たちのインターネット利

用についての調査結果を紹介した上で、やはりウィキペディアやユーチューブ、あるいはアマゾンやグーグルなどが大きな影響力を持っていることを指摘し、研究者もそれらのサイトを念頭に置いて信頼できる情報を発信していく必要があるのではないかと、いくつかの問題提起を行った。そして最後に、日本における研究状況がフランスの日本研究者に必ずしも共有されていないと述べ、この点においてよりよいコミュニケーションが取られるべきではないかとし、一つの方法としてポッドキャストを活用することができるとはならないかという示唆を行った。

これらの発題を受けたコメントとして、師茂樹はインターネットの持つ有用性と同時に、その限界についても意識しなくてはならないのではないかと述べ、渡辺学は匿名性と責任の所在が大きな問題としてあることと踏まえた上で研究者コミュニティも発展させられるべきではないかと論じ、またインターネットを通じた情報発信の一例として南山宗教文化研究所の試みを紹介した。

最後に会議全体を振り返るならば、インターネットを含めた情報通信技術が教育と研究においてもはや無視しえず、かつ有用でもあることが同時代的に共通の前提としてあらためて確認されると同時に、それ

に伴ういくつかの課題も明らかにされたということが出来る。例えば、インターネット上の情報の学術的な信頼性をどのように担保していくのかという問題があり、これは研究者、ひいては研究者コミュニティの情報通信技術への向き合い方を根本的に問うものであることが論じられた。これと関連して、信頼できる学術的な情報を初学者を含めた一般ユーザーに対してよりアクセスしやすい形で発信していくことの必要性が繰り返

返し述べられていたが、これは宗教文化教育の試みと関連させて今後より実践的に展開されるべきであろう。長時間におよぶ会議であったが、第一部・第二部ともに充実した議論が行われ、かつこのように国際的に共有されている前提と課題をあらためて確認することができたという点において意義深いフォーラムとなった。

第三十四回日本文化を知る講座 「現代人にとっての神々の物語 ―教材としての神話―」

さる平成二十年十一月、研究開発推進機構主催、渋谷区教育委員会の共催で、第三十四回日本文化を知る講座が開催された。今回は「現代人にとっての神々の物語―教材としての神話―」と題し、十一月八日から計四回にわたって行われ、各回とも一〇〇名を越す受講者が参加し、ご好評をいただいた。ここでは今回の講座の主旨と各回の要旨を紹介することにする。

開催の趣旨

神話という自分たちの生活とは無縁の荒唐無稽な物語というイメー

ジを持たれがちである。しかし現代社会においても神話に触れる機会は少なくない。小説や映画のほか、マンガ、アニメ作品など、神話から着想を得たものや、神々が登場する作品は数多くある。その中には世界のさまざまな宗教や神話を取り混ぜているものも少なくない。こうした作品を通して、神話に関心を持つ人々も増加していると感じられる。

学校教育ではどうかというところ、中等教育で神話を教える授業はほとんどなく基本的には学校で神話は教えられて来なかった。だがこの

状況はこれから変わりそうである。たとえば平成二十年告示の学習指導要領改正では、小学校第一学年、第二学年の「国語」の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に「(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。」という一文が加わった。この「神話」とは古事記など日本神話を指している。

また、平成十八年の教育基本法の改正では、宗教教育についての文言が「宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位は、教育上尊重されなければならない」となった。この「宗教に関する一般的な教養」の中には当然、「神話」も含まれてくることになるだろう。

このように学校教育の中で神話が取り上げられる方向へと向かいつつある一方で、神話を教えるということに、抵抗を感じる人たちがいることもまた無視できない事実である。

そこであらためて現代の日本人にとって、神話を知ることによいような意味があり、またどういった神話の学び方があるのか。神話の魅力はどこにあるのかということやさまざまな神話を例に確認する必要があると考えた。今回の企画は、以上のような問題意識のもとに、風土記、日本神話、旧約聖書、韓国の檀君神話

を取り上げ、それぞれの専門家が話をした。ここでは各回の内容をかいつまんで紹介する。

「風土記の魅力」

飯泉健司 (埼玉大学准教授)

「風土記」は七・一三年元明天皇が諸国に命じ、国々に伝わる言い伝えや地名の起源などを報告させたものである。

そこに描かれている物語は、現代からみると理解できない部分も多い。そこを読み解いていく想像力が必要になってくる。飯泉氏は、その具体的な例として、物語を伝える役割を担ったと推測される「シャーマン」に注目する。たとえば「出雲国風土記」の「国引き神話」では、土地をまさに鳥瞰したような表現で描



かれている。空から土地を見るようなことができる人間とは、呪力を持ち、神と交流することができると考えられていたシャーマンであろう。風土記にはそうしたその土地のシャーマンの体験に基づいた、シャーマンの視点による物語が伝えられている。他方中央官人の手によると推測される話もあり、風土記の神話に中央と地方の相克をみることも可能である。

このように風土記の記述を理解するためには、書かれたものだけでなく、実際に風土記の描いた地へ行き、「見え方」を確認し、書き手について考察することが重要であると述べた。

「日本神話をどう教えるか」

平藤喜久子 (本学講師)

現代社会において、神話はさまざまな役割を果たしている。聖書のようにな人々の世界観に影響を与える聖典として扱われることが多いものもある。ギリシア神話のように絵画など芸術作品を生み出す際の文化資源として長い間人々に活用されてきたものもある。

最近の日本では、とくにアニメやマンガ、ゲームなどで神話が資源として利用される機会が多い。これらは神話への関心を喚起しているが、神話が宗教的な表象であるがゆえ、不適切な表現により他文化の人々を



傷つける可能性も孕む。世界中の神話が文化資源として利用される現代だからこそ、世界の神話、宗教についての知識を得る必要があるのではないだろうか。

その際に重要な点は、神話の背景には、古代の人々の物事のとりえ方や生活、文化、宗教があるということを知ることである。一つの神話だけではなく、さまざまな地域の人々の神話について、その背景にある文化や地理的条件などを比較対照させながら学ぶことが必要だろう。日本神話についても、そうした世界の神話の一つとして、学ぶことが必要と考える。

「神話と」の創世記

日本昭男(立教大学)

いわゆる旧約聖書に残された「創世記」は、ユダヤ教徒によって記された文字通り「世界を創った」、はじまりについての物語である。紀元前六世紀にはほぼ出来上がっていたとされている。

本講演で月本氏は、「創世記」のなかでも起源神話とされる第一章から第一章、すなわち「天地創造」「エデンの園」「カインとアベル」「洪水物語」「バベルの塔」の物語を取り上げ、そこから看取できる古代イスラエル人の自然観、人間観、文明観について解説した。

たとえば「創世記」の自然観については、人が自然の支配者と位置づけられていると解釈されることが



あった。しかしその記述を厳密に読み解くと、そこには、人間を自然の支配者とするのではなく、人間が自然に対して責任ある存在とされていることがわかる。

またノアの方舟で知られる「洪水物語」や「バベルの塔」については、古代の弱小民族であったイスラエル人によるバビロニアなど当時の先進国に対する文明批判という視点から読み解いた。

「韓国と檀君神話」

丹羽泉(東京外国語大学)

十三世紀末の高麗の僧一然是、歴史書『三国遺事』を書き記した。このなかに古朝鮮の王である檀君の神話が残されている。

檀君とは、帝釈の息子で天から地上に降ってきた桓雄が熊女と結婚をしてもうけた息子で、朝鮮を建国し一五〇〇年もの間治めたとされている。

丹羽氏は、この檀君の「神話」が、現在の韓国においてどのような存在であるのかを、教科書や研究書などの例を示しながら紹介した。

たとえば韓国では檀君が古朝鮮を建国したとされる紀元前二二三三年をはじめるとする檀君紀元が一九六一年まで用いられていた。

また教科書などでも、檀君神話は「事実」とされ、檀君の古朝鮮建国の理念については「わが民族が困難

にあうたびに自覚心を目覚めさせてくれる原動力」であると述べられている。

このように檀君「神話」は、朝鮮建国という歴史的な事実を反映して



縄文時代の大形石棒

(考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究・公開)事業

谷口康浩(兼担准教授)

縄文人が作り出した数々の遺物の中でも、その巨大さでひととき目を引くのが「大形石棒」である。ファロス(男根)のイメージから形作られた石製品である。大形石棒の多くは、最終的に縄文人自身の手によって破壊されてしまっており、私たちが手にする出土品の大部分はいわば欠片にすぎないのだが、それでも実

いとされ、現在でも民族のナショナルイズムと密接に関わった「聖なる物語」として扱われている現状を述べた。

今回の講座を企画するにあたっては、本学の故青木周平教授にご相談し、教材としての日本神話の可能性についてご教示いただき、第一回目の講演もお引き受けいただき、病に倒れられ、ご講演頂くことは叶わなかったが、突然にもかかわらず飯泉先生が快くお引き受け下さり、青木先生の意を汲んでご講演をしていただいた。飯泉先生には心より御礼申し上げます。

最後に青木先生に心から哀悼の意を捧げます。(平藤喜久子)

物を手にすると、縄文時代の人々が時間とエネルギーを惜しみなく傾注して製作したものだということがひしひしと感じられる。

縄文時代の遺物の中には、縄文人の儀礼祭祀にかかわる数々の呪物がある。小林達雄先生はそれらを「第二の道具」と総称したが、大形石棒はその中でも群を抜いて大きく重厚

であり、製作にかかる労力も並大抵ではない。縄文人の背丈をはるかに越える大形品も稀ではなく、重さが五十キログラムを超えるような例にもしばしば遭遇するのである。長野県佐久町に立っている大形石棒は全長二メートル三十センチもある。一本の石製品としてこれほど大きいモノは、他の時代を見渡しても滅多にない。東京都忠生遺跡A地区や東京都多摩ニュータウンNo.72遺跡の縄文中期、勝坂式期の竪穴住居跡から発見された出土品は、大形石棒がその発生段階から、いかに大形で重厚なものであったのかをあらためて教えた。圧倒的な存在感だ。

縄文人がこれほどまでに力を込めた造形が、どうでもいい存在であったはずはない。縄文人がどのような神観念や世界像をもっていたのかはなかなか掴めないが、大形石棒は彼らのそうした精神文化に何らかの形で必ず関係していたはずである。儀礼や祭祀に関わる呪物の中でも最も重要な象徴であっただけに、社会や文化の中での意味もきわめて大きかったにちがいない。

遺跡の中での出土状況を検討してみると、大形石棒の祭儀は家や葬制と密接に結びついていることがほぼ明らかである。家族や親族集団が奉祭する祖先祭祀や死者儀礼の性格がうかがえ、それは特に人の死に関

わる儀礼に強く結びついていることが分かる。大形石棒の発生は、縄文人の中に祖先や出自といった観念が明確な形で発達してきたことを表わし、親族秩序の強い部族的な社会構造の確立とともに、その組織原理となる祖先祭祀が体系化されてきたことを意味する、というのが今の私の大筋の理解である。漢字の「祖」のつくりにある「且」は、男根を原義とするという説もあり、これにもどこか通じるものがある。

縄文人の精神文化や社会組織を考える上での意義はきわめて大きいはずなのだが、大形石棒の研究はこれまで十分に行われてきたとはいえない。それどころか、意味の捉えどころのないものとして、軽視されたり後回しにされたりしてきた。縄文時代を研究する者として、その点を遺憾に思う。考古学にとって大切な資料である発掘調査報告書を調べてみても、縄文土器については個々の破片について詳細な観察記述があるのに、石棒については実測図と簡略な説明があるだけ、というようなケースが少なくない。「石棒の破片」という以外に情報が一切書かれていない最悪の例も目にする。これはどう考えてもよくない。固有の精神文化や根源的なイデオロギーを無視して、その文化を理解しようとするのは無理だと思うからだ。

大形石棒にかぎらず、考古学の立場から信仰生活や精神文化に関わるモノの象徴的な意味を解き明かしていくためには、遺跡の中での出土状況や遺物そのものの遺存状態の詳細な観察が不可欠である。容易ならざる研究対象であるからこそ、大形石棒を使用した縄文人の具体的な行為やそのコンテクストの復原につながる状況、状態を、できるだけ詳細に観察しなければならぬ。大形石棒の正体は、そうした基礎データの蓄積によってのみ、だんだんと判明してくるにちがいない。

私たちは現在、このような(國學院らしい)認識の下に一つの研究プロジェクトに取り組んでいる。「行為の痕跡をつかめ」が当面のテーマ

研究開発推進センター研究事業 「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」

山口県調査概要

研究開発推進センター PD 研究員 戸浪 裕之

中村 聡



だ。来年度には、大形石棒の原石産地と製作遺跡の踏査、試掘も計画している。全面オープンした伝統文化リサーチセンター資料館には、大形石棒の実物も展示されているので、より多くの方々にぜひ実見して少しでもこの問題に関心をもってほしいと思っている。

本研究事業の目的

本センターの研究事業「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」は、近代日本における戦没者の慰霊・追悼について、主に祭祀と、それが示す霊魂観の形成と変容に視座を置き

ながら、その歴史的展開を跡付けたうえで、日本における人神や英霊に対する祭祀を「招魂の系譜」として理解する枠組みを提示することを目的としている。そのためには、まず古代末期から現代に至る「人神祭

「祀」の流れを跡付ける必要があるとともに、改めて近代の神道における「英霊祭祀」をその流れの中に位置づける作業が必須となる。この目的を達成するため、二十年度は二回にわたる調査を計画。招魂社や靖国神社の源流とされる、幕末期の長州藩における戦没者祭祀の実態に関する基礎的な史料の収集と、桜山招魂社(現、桜山神社)など藩内の招魂社の祭祀状況の把握を目的とした。

第一回山口県調査

第一回目の調査は、本センター講師の中山郁、同PD研究員の中村聡と戸浪裕之の三名により、平成二十年九月十七日(水)～十九日(金)の三日間にわたって行なわれた。調査の具体的な目的は次の四点である。(一)山口県文書館所蔵の招魂社関係文書を閲覧し、その概要を把握するとともに、必要な史料をデジタルカメラで撮影・収集すること。(二)山口県護国神社および桜山神社を訪問し、招魂場の現状等をカメラ撮影し、データ化すること。(三)長州藩における招魂祭祀についてまとまった研究をされている、山口県護国神社神職で本センター共同研究員の津田勉氏を訪ね、長州における招魂社研究に必要な史料のアドバイスを受けるとともに、今後の研究協力について協議を行なうこと。

まず十七日は、山口県護国神社に正式参拝ののち、津田勉氏を訪問し、氏がこれまで研究されてきた山口県内(長州藩)における招魂社研究に関して意見交換を行なった。また、十七日から十九日の午前中にかけて、山口県文書館において文書調査を実施し、「招魂場記録」などの招魂社関係文書を閲覧・撮影を行ない、十九日午後からは、下関市上新地に鎮座する桜山神社の調査に赴いた。桜山神社では、境内内にある奇兵隊士たちの「神霊碑」に関する調査を中心に行なった。

第二回山口県調査

第二回目の調査は、前回と同じ参加者により、同年十一月十四日(金)～十六日(日)の三日間にわたって行なわれた。前回を受けて、具体的な目的は次の二点である。(一)山口県文書館所蔵の招魂社関係文書を閲覧し、その概要を把握するとともに、必要な史料をデジタルカメラで撮影・収集すること。(二)再度、津田氏と、招魂社研究の情報交換ならびに今後の具体的な研究協力方法について協議すること。今回は、十四日～十六日の三日、津田氏が論文で引用されている文書館収蔵史料をすべて閲覧・撮影するとともに、前回に引き続き、明治

十八年までの招魂社関係の公文原簿類の閲覧・撮影を行なった。また十五日には、前回同様、津田氏と懇談を行ない、招魂社研究に関する情報交換の場を設けた。

調査から分かったことと今後の展望

これらの調査から、以下のような知見が得られた。(一)明治十八年までにおける山口県下の招魂社祭祀は、明治十年までには祭祀執行や修繕などの神社維持に関する事務手続き、また経費捻出の方法などがほぼ確定したこと。(二)祭神に関しては一貫して調査が繰り返され、戦死者個々を漏らさず合祀することに力が用いられていること。(三)明治十年西南戦争直後には山口県出身の戦没者の合祀が各自の家で戦没者を祭る「自祭」を前提に認められていること。(四)旧長州藩諸隊や旧領主が、明治十年代における県内各招魂社祭祀を支える基盤になっていたこと。殊に、山口県庁で招魂社事務を担当していたのが、元奇兵隊士の南野一郎であったことなど、招魂社の維持運営に「戦友」を基層とする人々が深い関わりを有していたことが明らかとなった。(五)招魂社関連の史料の傾向として、明治十年以降から次第に「招魂墳墓」関連の事務が増え、明治十八年に県によって「県内招魂墳墓明細帳」が作

成されていること。

これらの事例から、戊辰戦後約二十年といえるこの時期に、招魂社、招魂墳墓がひとつの画期を迎えていた可能性がうかがわれる。今後は、引き続き二十年代の招魂社関係の史料を閲覧・撮影するとともに、今年度に収集した史料をもとに小さいながらも論考を作成する必要があること。また、これらの山口県の事例が、他の地方でも同様であるのか否かを調査する必要がある。また、幕末期の招魂社祭祀を考える際には、長州藩に於ける招魂社祀に、思想的・精神的な役割を果たし、桜山招魂社の創建に深く関わった。奇兵隊士会計方で国学者の白石正一郎の関係文書(長府博物館所蔵)も調査する必要がある。

〈追悼〉

青木周平教授と研究所、そして機構

阪本是丸

本機構の兼任教授であり、伝統文化リサーチセンターの研究プロジェクト「國學院の学術資産に見るモノと心」の研究代表でもあつた青木周平文学部教授が、去る平成二十年十一月十一日に逝去された。

青木教授は人も知るとほり、古事記、日本書紀をはじめとする上代文学研究の第一人者のみならず、國學院の伝統である「国学的研究教育」を実践し、牽引してきた研究者・教育者であった。豪放磊落な性格、緻密で論理的な研究、そして温和さを湛へた厳しい教育。同世代の私にとつて、彼は眩いばかりに輝く才能と人格を併せ持つ快男児であつた。

そんな彼と知り合つて、かれこれ三十年以上になる。長い付き合いといへば、さうともいへるが、つい最近になつて知己になつたやうな気がする。今となつては、何となく、不思議な付き合ひであつたとも思ふ。

周平さんが亡くなつて三ヶ月が経ち、神道で謂へば百日祭を迎へようと

してゐる時期に際し、改めて想ひ出されることがある。それは、十年前の平成十一年の冬のこと。当時、上田賢治学長の任期満了に伴ひ、阿部美哉教授が次期学長に選出され、阿部氏は教授の要となる教務部長候補者として君に白羽の矢を立て、小生にその就任依頼を命じた。

或る日、今は無い常磐松三号館の神道学第七研究室に来てもらひ、小生はその旨を話した。君と俺との関係だから、と勝手に思ひ込んで即座の内諾を予想してゐた小生を、君は暫し困惑させ、短気な俺を苛々させてくれた。どれほどの時間が経つたのか、よくは覚えてゐないが、君が最後に言つた言葉だけは今でも鮮明に憶えて居る。「是丸さん、引き受けるけど、阿部さんの言ふ通りといふ訳にはいかないよ」、さつぱりと君は言つた。君には不屈の信念がある、さう確信したのであつた。

それからの周平さんは教務部長、文学部長、そして理事や副学長として、

大学のために粉骨碎身の態で働いた。しかし、見た目にも激務と分かる日々の連続であつたにも拘はらず、君の天性の資質と努力がさうさせたのであらう、君は、専門とする古事記や万葉集に関する研究を精力的に遂行し、さらには様々な事典類の編纂や荷田春満関係の仕事を次々とこなしていつた。

今、私は思ふ。さうした君の研究者としての原点は、僕らが共に育てられた日本文化研究所にあつたのであり、そして、その終点は、その後身である研究開発推進機構にあつたのだ、と。斯う断言しても、多分、君は笑顔で同意してくれるだらう。

君が研究所に入つたのは、昭和五十一年のことであつた。当時、故内野吾郎先生が国学者の伝記資料を集成するプロジェクトを主宰され、また中村啓信先生が日本書紀の研究に従事されてゐた。君はその両方に関はり、国学及び書紀研究といふ、最も國學院らしい学問を錚々たる先生の許で学ぶことができたのである。

五十二年の九月からは小生も嘱託員(研究補助員)として研究所に入所し、内野先生、上田先生の指導のもと、鈴木淳氏を兄貴分として国学者の伝記資料の集成作業を手伝ふやうになつた。君が上代文学研究にとつて、近世国学が決定的に重要であると認識し、それ以降の研究を続けられたのもかうした研究所の得難い研究環境があつたからである。

取分、鈴木氏の職人技とも言ふべき精緻で徹底的な書誌的研究方法から多くを学んだことは、仕合せであつたと君も思つてゐたに違ひない。洵に、君も僕も、良き先輩・同僚に恵まれてゐたのが研究所であつた。

内野先生の全体を驚嘆みにせんとするばかりの雄大な国学研究、中村先生のコツコツ型の日本書紀研究。その両者を兼ね備へた君の研究は、正に君が最期まで畏敬して止まず、また研究対象そのものでもあつた武田祐吉先生のそれではなかつたか。

平成十九年四月、國學院大學研究開発推進機構が発足し、君は、その機関である伝統文化リサーチセンターで、「國學院の学問」を研究・展示を通して世に知らしめるといふプロジェクトの代表に就くことになつた。君は「研究所」に帰つてきたのだ。これで漸く昔のやうに何時でも君と、国学や武田先生を始めとする國學院の学問について、酒でも酌み交はしながら語れる機会が到来したと喜んでゐたが、幽明境を異にした今、それも叶はぬ夢となつた。

青木君。大学の研究体制の在り方を論じるのも悪くはなかつたが、本当は、君も僕もその基盤である國學院の学問を語りたかつたのだ。さう思ふと、やはり、人生は悲しみに満ち満ちてゐる、と言ふしかない。

彙報

※伝統文化リサーチセンターの活動については『伝統文化のモノと心』(ニュースレター)をご参照ください。

会議

○全体

- ・平成二十年度第二回企画委員会、七月十六日(水) 十一時～十二時三十分 A M C 棟○六会議室
- ・第三回企画委員会、九月十日(水) 十一時～十四時 A M C 棟○六会議室
- ・第二回運営委員会、十月八日(水) 十一時～十二時 A M C 棟○六会議室
- ・第二回人事委員会、十月十五日(水) 十一時五分～同十五分 A M C 棟機構長室
- ・第二回資格審査委員会、十月十五日(水) 十一時三十分～同四十分 A M C 棟機構長室
- ・第四回企画委員会、十一月十九日(水) 十一時～十二時四十分 A

M C 棟○六会議室

- ・第五回企画委員会、平成二十一年一月二十八日(水) 十一時～十二時三十分 A M C 棟○六会議室
- ・第三回人事委員会、一月三十日(金) 十時三十分～十一時三十分 場所 A M C 棟○六会議室
- ・第三回資格審査委員会、一月三十一日(金) 十一時三十分～十三時 場所 A M C 棟○六会議室
- ・第三回運営委員会、二月十九日(木) 十一時～十三時 A M C 棟○六会議室

○日本文化研究所

- ・平成二十年度第二回日本文化研究所所員会議、七月九日(水) 十一時～十二時三十分 A M C 棟○六会議室
- ・平成二十年度第二回デジタル・ミュージアムプロジェクト企画委員会会議、平成二十年七月十七日(木) 十六時～十七時三十分 A M C 棟○六会議室
- ・第三回日本文化研究所所員会議、八月二十八日(木) 十一時～十二時三十分 A M C 棟○六会議室

室

- ・第四回日本文化研究所所員会議、平成二十年十月二十二日(水) 十一時～十二時 A M C 棟○六会議室
- ・第三回デジタル・ミュージアムプロジェクト企画委員会会議、平成二十年十月三十日(木) 十時三十分～十二時 A M C 棟○六会議室
- ・第五回日本文化研究所所員会議、平成二十一年一月二十一日(水) 十一時～十二時 A M C 棟○六会議室

○学術資料館

- ・平成二十年度第二回学術資料館会議、七月十六日(水) 十七時～十八時 A M C 棟プロジェクトルーム2
- ・第三回学術資料館会議、十月二十二日(水) 十七時三十分～同四十分 A M C 棟○六会議室
- ・第四回学術資料館会議、平成二十一年一月二十一日(水) 十五時～十五時三十分 A M C 棟○六会議室

○校史・学術資産研究センター

- ・平成二十年度第二回校史・学術資産研究センター会議、七月二十三日(水) 十二時～十三時三十分 A M C 棟○六会議室

- ・第三回校史・学術資産研究センター会議、十一月五日(水) 十一時～十二時 A M C 棟○六会議室

公開講座・講演会・シンポジウム
(平成二十年四月一日以降)

○全体

- ・学術メディアセンター開設記念講演会
「芭蕉とは何か―奥のほそ道」の謎」講師・嵐山光三郎(本学客員教授・作家)
- 「グローバル化・情報化時代における日本文化」講師・青木保(文化庁長官)
- 十月十二日(日) 十四時～十六時十分、A M C 棟常磐松ホール
- ・平成二十年度公開学術講演会「神社本殿の建築的特質」講師・藤澤彰(芝浦工業大学教授・伝統文化リサーチセンター客員教授) 十月十八日(土) 十三時～十四時三十分

分、AMC棟常磐松ホール

・第三十四回日本文化を知る講座「現代人にとつての神々の物語―教材としての神話―」

◇第一回 十一月八日(土)「風土記」の魅力」講師：飯泉健司(埼玉大学准教授) (青木周平・本学文学部教授より変更)

◇第二回 十一月十五日(土)「日本神話をどう教えるか」講師：平藤喜久子

◇第三回 十一月二十二日(土)「神話としての創世記」講師：月本昭男(立教大学教授)

◇第四回 十一月二十九日(土)「檀君神話と韓国」講師：丹羽泉(東京外国語大学教授)

各回とも十三時三十分～十五時三十分 百二十周年記念二号館 二一〇一教室

○日本文化研究所

・国際研究フォーラム「ウェブ経由の神道・日本宗教―インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ―」十月二十六日(日) 第一部研究者フォーラム、十時～十二時三十分、AMC棟〇六会

議室。第二部国際研究フォーラム「発題者 アラン・カミングス(SOAS, UK)、ミビヤエル・ヴァフトゥカ(Tübingen University, Germany)、ジャン・シエル・ビュテル(INALCO, France)、コメンテータ師茂樹(花園大学)、渡辺学(南山大学)、十四時～十八時 AMC棟常磐松ホール

○研究開発推進センター

・講演会「近代社会形成と宗教」講師：トレント・E・マクシー(米国アイマスト大学) 七月十六日(水) 十五時～十六時三十分、AMC棟〇六会議室

出張

・内川隆志、加藤里美 学術資料館 展示関連資料受取のため、流山市教育委員会、六月二十七日(金)

・内川隆志、加藤里美 学術資料館 展示資料寄託のため、新潟県立歴史博物館、七月六日(日)

・内川隆志、加藤里美、新原佑典、藪下詩乃、野尻義敬、江戸邦之、田島太良、朝倉一貴「山形県庄内町須部野A遺跡学術調査」プロ

ジェクトによる調査のため、山形県須部野A遺跡、出羽三山歴史博物館、湯殿山神社、月山神社、南岳寺、海向寺、成高院、庄内町教育委員会、庄内町図書館、いでは文化記念館、白鷹町図書館、八月四日(月)～十日(日)

・内川隆志、加藤里美、新原佑典、藪下詩乃、学術資料館 展示関連資料調査のため、新潟県長岡市、十一月(月)

・松本久史、小林威朗「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究」プロジェクトによる調査のため、鳥取県立博物館、鳥取県立図書館、加知彌神社、八月二十八日(木)～三十一日(日)

・中野裕三、星野光樹「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究」プロジェクトによる調査のため、鳥取県立博物館、鳥取県立図書館、加知彌神社、八月二十九日(金)～三十一日(日)

・小林達雄、内川隆志 学術資料館 展示関連資料借用のため、佐世保市教育委員会、九月十日(水)～十一日(木)

・松本久史、三ツ松誠「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究」プロジェクトによる調査の

ため、和歌山市立博物館、和歌山大学附属図書館、九月十三日(土)～十五日(月)

・吉田恵二 学術資料館 展示関連資料借用のため、兵庫県立考古博物館、九月十九日(金)

・内川隆志 学術資料館 展示資料のレプリカ作成と調査のため、鳥根県立古代出雲歴史博物館、九月二十一日(日)～二十三日(火)

・吉田恵二 学術資料館 展示資料のレプリカ作成と調査のため、鳥根県立古代出雲歴史博物館、九月二十二日(月)～二十三日(火)

・加藤里美、田中秀典「近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用の研究」プロジェクトによる調査のため、瑞忍寺、名古屋市図書館(鶴舞中央図書館、東図書館)、愛知県図書館、十月二十六日(日)

・内川隆志、学術資料館 展示資料寄贈のため、鈴木敏氏宅(青梅市)、十二月二十日(土)

資料紹介

河野省三学生時代ノート

ここに紹介する資料は、現在、伝統文化リサーチセンターで調査・整理が進められている「河野省三関係資料」の一部で、河野省三(一八八二—一九六三)が國學院に在学していたときの聴講ノート類である。この「河野省三関係資料」は、河野の聴講ノートや作文類、学部・大学院における講義ノート、自筆原稿、書簡類などから成る膨大な資料群である。これらのなかでも、とりわけ在学時の聴講ノート類は、明治三十年代後半における國學院の講義科目の内容を知ることができる資料として注目される。

國學院では、その設立当初から、帝国大学に劣らぬほど、当時第一級の学者たちを講師陣に迎え、教育を行ってきた。この設立以降の國學院における講義科目と担当の講師陣については、『國學院大學八十五年史』や『國學院大學百年史』などに詳しい。しかし、資料不足のため、それぞれの講義の内容を窺うことが難しいという憾みがあった。そのためにも、当時の講義内容を窺える資料



の発掘が、必須の課題の一つとなっていたのである。今回、所在が確認された聴講ノート類は、河野が國學院に在学していた明治三十五年から三十八年までの

もので、限定された時期ではあるが、この時期の講義科目の内容を知ることができるようになったことの意味は大きい。これまで確認できた聴講ノートは次のとおり。

石川岩吉「日本倫理筆記」二冊、友枝高彦「倫理学」、同「心理学」、深作安文「教育学」、田中義能「神道哲学史」、丸山正彦「神祇史」二冊、黒板勝美「古文書学」、藤岡継平「徳川時代史」、三浦周行「武家制度」二冊、同「日本法制史」

二冊、宮西惟助「日本制度通補遺」二冊、矢野仁一「西洋史」三冊、武島羽衣「日本文学史」、同「修辭学」、宮西惟助「軍記物語積義 保元物語」、畠山健「古今集小鏡」、塩谷温「支那文学史」、金澤庄三郎「語学史」、西川一男「憲法講義」などである。

このほか、同時期の作文類、詠草類などもあり、これらは「作文」「作歌」の講義の際に作成されたものと考えられる。また時期は下がるが、國學院大學教授として、河野自身が学生に講義した際の講義ノート類(「国民道德の涵養・国民道德の本義」「明治以降に於ける神道論」など)も残されている。これらも、当時の國學院の講義科目の内容を知ることのできる貴重な資料といえよう。

これらの資料の一部については、伝統文化リサーチセンター資料館に展示されている。今後はこれらの資料の分析を通じて、当時の講師陣はどのような授業を行っていたのかなど、皇典講究所・國學院の制度に位置づけていく作業を行なう予定である。